



# 高原の風だより

2016 (平成28) 年12月 発行 <第7号>

## 東京経済大学国際シンポジウム

### ～自治しうる〈主体〉と〈場〉を問いなおす～

～基礎自治体のサステナビリティとローカル・ガバナンスに関する国際シンポジウム～

11月5日、6日と2日間にわたり東京経済大学で標記の国際シンポジウムが行われた。難しいテーマで分かりづらいが、簡単に言えば「小さな自治体（地域）の持続可能性と住民、地域による主体的なまちづくりを考えよう」というもの。

同シンポジウムには、海外からフランス（リヨンス・ラ・フォレ市長）とドイツ（コルンラーデ市長）、国内からは県内から南木曾町（妻籠を愛する会藤原常務理事）と木曾町（元木曾町職員 大目）の4人が参加し、事例発表やパネルディスカッションを行った。



#### ■ 地域等の「主体」と「場」に注目

シンポジウムは東京都国分寺市にある東京経済大学で2日間にわたり行われ、研究者や一般市民など200人が集まった。初日には最初に同大学の羽貝正美先生が「人はコミュニティなしでは生きられない。しかし、コミュニティはもちろん、それを包み込む市町村は、今後も存続が可能なのか。困難だとすればどうすればよいのか」と、自治体が直面している課題に触れられた上で「少子高齢化や人口減少、経済の低成長、財政基盤の弱体化などが進み、道路等のインフラ整備や子育て、教育、福祉など様々な分野で公共サービスに影響が出るおそれがある」とし、「この状況を克服し未来に開かれた自治体や地域をつくり、維持していくためにはどうすればいいのか。その手がかりとして行政や地域、住民などの『主体』と行政と地域や住民などをつなぐ『場』に注目した。今までの調査・研究を進める中でその個性と魅力に気づかれた国内外4自治体（地域）の事例に触れながら考えてみたい」と問題提起が行われた。

#### ■ かつての「弱み」が今の「強み」に。

シンポジウムでは私たちの事例発表などのほかテーマに密接に関わる社会哲学や公共経営学、行政学、風景論、景観工学、建築学など様々な分野の先生方から視点提起がなされた。

そういうなかで4自治体（地域）に共通している点があることが分かり興味深かった。リヨンスでもコルンラーデでも鉄道や高速道路から遠く、産業が発展しなかったことから古い町並みや豊かな自然、美しい景観が残りがつての弱みが現在の強みになっているのだ。まさに妻籠も開田高原も同じだと感じた。



記念写真(左から藤原理事、リヨンス市長、コルンラーデ市長、私)

～小さな自治体の持続可能性を目指して～

# 住民の自発的な活動が地域を支える

フランスではアソシアシオン、ドイツではフェラインと呼ばれる住民の自発的なサークル活動が行われているがリヨンスでもコルンラーデでもとても盛んで、人々の楽しみであるこのような活動が、同時に自治を支え地域の活性化に大きく貢献している。

また、リヨンスでもコルンラーデでも住民と議会と市長の関係がとても近い。リヨンスでは平日の午前中、住民はいつでも市長さんに会って話ができるという。他の役職も兼務していて忙しい市長さんであるが、とても素晴らしい取り組みだ。コルンラーデでは、公民館で議会が行われるという。大学のゼミのようなリラックスした雰囲気の中で議員と市長が話し合っているのを視察で訪れた先生たちが見学したという。このように住民にとって議会も市長も身近な存在なのだと感じた。

以下、4自治体（地域）の報告の概要を紹介する。

## ■行政が住民の主体的活動を支援 ～リヨンス・ラ・フォレ（フランス）～



プルヴィエ市長

観の保全に努めている。

フランスではアソシアシオン（住民や地域の主体的な参加を前提として、多様な文化的、社会的活動を恒常的に担う非営利団体）と呼ばれる組織・クラブ・サークル活動が非常に盛ん。リヨンスでも絵画やサッカー、自転車、料理等等など 15 余りのアソシアシオンが存在し活発に活動している。歴史的な建造物も多いリヨンスの街並み行政がこれらの主体的な活動を積極的に支援し、活力あふれる地域づくりを進めている。

フランスには3万6千ほどの基礎自治体（コミューン）があると言われているが、大都市パリから 100 km 圏内の近距離にあるリヨンスもその一つ。人口は約 800 人。広大で美しい国有林を有し緑にあふれ、歴史的な建造物や文化遺産も多く存在する。素晴らしいホテルやレストランなども整っている。1996 年にはフランスの最も美しい村連合に加盟。都市計画をはじめ、景観憲章を策定し花いっぱい運動を行うなど多様な取り組みを行って美しい景



## ■自発的な組織活動が自治を支える ～コルンラーデ（ドイツ）～

ドイツにはゲマインデと言われる基礎自治体があるが、北西部のニーダーザクセン州に属するコルンラーデもその一つ。協会が町の中心で畑や林、河川（フンテ川）などの豊かな自然に囲まれ美しい景観と清潔感あふれる街並みが自慢。人口は約 800 人、面積は 18.45km<sup>2</sup>（人口密度 44 人）で、住民に身近で緊密感あふれる空間の質が保たれている。

ドイツにもフランスのアソシアシオンと同じような組織、フェラインが存在する。フェラインは同じ興味や目的を持つ住民の自発的な組織で、射撃祭などのイベントの企画や、スポーツや音楽、郷土の伝統文化の保存など様々な文化的、社会的な活動や地域貢献を行っている。具体例として釣り人協会は、川の流れを屈曲させて支流や湿地を形成し、生態系を活性化させる再自然化事業などを実施している。このようにコルンラーデの自治活動は、フェラインが中心になり支えている。



リンデマン市長



豊かな自然に囲まれたコルンラーデ

## ■重伝建指定・町並み保存の先導者 ～南木曾町妻籠～

今でこそ年間 50 万人の観光客でにぎわう南木曾町の妻籠宿。かつては、中山道の宿場町として栄えたが鉄道が通らず国道からも遠いため寂れていった。周囲は深い山々に囲まれ農業は発展しない。若者は高度経済成長の中で都会へと流出。集落の建物の軒が傾き、活気を失っていた。

昭和 43 年、明治 100 年記念事業として各都道府県で記念事業が行われたがその際、妻籠宿の保存が長野県の記念事業になった。この時に尽



妻籠宿の町並み

その面積は 1,245ha と旧妻籠村全域がエリアに含まれていた。重伝建の平均面積が約 35ha と言われており、いかにその面積が広範囲に及んでいたかが分かる。

妻籠は重伝建・町並み保存の先導者として冬期大学講座や一石柅立場茶屋修復、ふれあい館の整備などを実施し、今なお地域住民と共に挑戦を続けている。

## ■景観を生かした地域づくり ～木曾町開田高原～



大目

れている。中でも特筆すべきは広告看板を村全体で規制している点だ。以前、専門家が「看板が消えた村」として驚いていたが、俗化されていない環境が大きな資源であると考えている。ただ、そのことによって来訪者のサービス低下につながってはならないので、平成 4 年からは専門家の調査報告をもとに、開田の農村風情の代表格「ハゼ」をモチーフにして、統一サイン整備を実施するなど現在も様々な景観事業を実施している。

また、地域自治組織や村おこしグループ等による自主的、主体的なまちづくり活動も継続的に行われているが、地域の持続可能性にとって大切なのは「地元深く根ざした強い愛着」だと改めて痛感している。

開田高原の一番の魅力は霊峰御嶽山の雄姿と豊かな自然、美しい景観だ。昭和 47 年には開田高原開発基本条例を制定し、乱開発を防止すると共に美しい自然景観の保全を行ってきた。

条例では一定規模の開発（建物の建築の場合は 600 m<sup>2</sup>以上など）については、事業者が開発協定締結の義務を課している。また、建物の高さは 13m に制限し、御嶽山の眺望をささげると周囲の自然景観を壊さないように配慮がなさ



伝統的な切妻の民家が残る柳又地区

### <木曾五木の一つコウヤマキで作られた統一サイン>



ハゼ



説明サイン



境域サイン



中域サイン



広域サイン

## はりきりご長寿列伝

しげお  
岩井 茂雄さん (81歳・木曾町) ⑦

NHKテレビのイブニング信州の中で放送している「はりきりご長寿列伝」で、木曾町福島の岩井茂雄さんを紹介させていただきました。(8月25日放送)

### 若い人には負けんように頑張っています ~木曾踊り保存会~

毎年夏の風物詩になっている木曾踊りが今年も8月1日から16日まで毎晩、旧町役場支所前の広小路で行われました。木曾踊り保存会が中心になって実施していますが、その輪の中で80歳を過ぎてても交代で音頭を取り、張りのある声を響かせているのが岩井茂雄さんです。「好きでやっているだけ。女房はもうやめれやめれっていうけれど・・・」と微笑む岩井さん。4年ほど前までは会長を務めていましたが、その後もメンバーの一人として踊り続けています。



岩井茂雄さん



権兵衛トンネル開通記念で歌う岩井さん

岩井さんは、父親が戦時中に出征先で病死。中学を卒業するとすぐに働き始めました。農作業に加え建築現場での作業や御嶽山の強力、鉄道の保線など重労働が続きました。昭和35年には安定した収入が必要、と木曾山林高校の実習技師として就職し35年勤め上げました。

そんな中、20代の頃から打ち込んできたのが木曾踊りでした。「音頭が取れるようになると面白かった。それでも勇気がいった」と当時を懐かしく思い起こします。

平成2年には木曾踊り保存会に入会し、本格的に取り組むようになりました。町内外のイベントやお祭りなどにも参加するなど、今までに全国各地を回り木曾踊りを守り伝えてきました。

「正調木曾節は一声で歌うんですが、最近は息切れしてなかなか高い声を出すのが大変です。でも若い人には負けんようにと頑張って頑張っています」と話す岩井さん。現在、木曾踊りは町の文化財になっていますが、将来的には県の無形文化財に昇格して欲しいと願っています。これからの活動については「平成30年には保存会の100周年があるから最低あと2年は務めようと思います」と笑顔がこぼれました。

### 加藤社長(「美しい村」理事)らと懇談

先月、日本で最も美しい村連合で理事をやられている革新企業研究所(株)の加藤俊宣社長が来町、南木曾町で向井町長や妻籠を愛する会の小林理事長、藤原理事らと一緒に懇談の機会に恵まれました。

加藤社長は、「美しい村」の理事ということもあり全国各地の美しい村巡りを行っています。

小林理事長からは、妻籠宿の現在に至るまでの様々な苦労話など貴重な話をうかがうことができました。来年は妻籠宿の秋の一大イベント・文化文政風俗絵巻之行列が50周年を迎えるとのことで、さまざまな企画が検討されているようです。



左から藤原理事、私、加藤社長、向井町長、小林理事長

旅の魅力は豊かな自然や快適な環境(施設)、そして美味しい食事などはもちろんですが、やっぱり一番は「人」だという加藤社長の言葉が印象的でした。

### 編集後記

「高原の風だより」(第7号)が完成しました。年にわずか4回の発行ですが、仕事の合間を縫っての取材や執筆など結構時間がかかります。それでも多くの皆さんから「会報読んだよ」「毎回楽しみにしているよ」という声に励まされながら頑張っています。

さて、今年も余すところわずかになりました。大変冷え込むようになりましてので、健康には十分にご留意の上、良いお正月をお迎え下さい。



編集・発行者： 大目 富美雄 (おおめ ふみお)

〒397-0301 長野県木曾郡木曾町開田高原末川 5190 番地

電話& FAX 0264-42-3661 携帯 090-2526-7156

E-mail info@ome-fumio.com